

切ない物語

——レオーノ・キューストと「ポラーノの広場」——

遠藤 祐

はじめに

宮澤賢治の長い物語のひとつ、「ポラーノの広場」⁽¹⁾を開くと、題名の次に「前十七等官 レオーノキュースト誌／宮 沢 賢 治 訳 述」という二行のあることに気づいて、オヤと思う。「誌」はへしるす」と読んでいいのだろうか、作者名ではなく、物語の書き手（とされる人物）と訳者（とされる人物）との名がはじめに掲げられる語りのカタチは、珍しい。作者としては、「ポラーノの広場」の成立状況を明らかにしておく必要があったものと思われる。あるいは、「前十七等官」という帝政ロシア風の肩書きをもつ人物、物語の書き手であってしかも作中人物のひとりであるレオーノ・キューストの存在をはっきりと示して、読者の注目を彼のうえに集めようとする意識も、そこに働いていたのではなからうか。そう考えると、キューストの記す次の一節、「あのイーハトーヴォのすきとほった風、夏でも底に冷たさをもつ青いそら、うつくしい森で飾られたモリーオ市、郊外のぎらぎらひかる草の波、／＼またそのなかでいっしょになったたくさんのひとたち、ファゼーロとロザーロ、羊飼のミーロや顔の赤いこど

もたち、地主のテモ、山猫博士のボーガント・デステウパーゴなど、いまこの暗い巨きな石の建物のなかで考へてみるとみんなつかしい青いむかし風の幻燈のやうに思はれます」が、わたしの眼には意味深いものにみえてくる。かつては、自分も身を置いていたへところの在り様と、そこで出会ったへひとたちの姿が、「いま」のキューストには「みんなつかしい青いむかし風の幻燈のやうに」思われる、という。であれば、続いて彼の想いに現われてくる、イーハトーヴォを、モリーオ市とその近郊を、舞台とする当時のさまざまなき事もまた、ひとり「この暗い巨きな石の建物のなか」にいる書き手の眼前に、「幻燈」の情景のごとくに映しだされたはずである。「五月のしまひの日曜でした」以下の記述に接する読者は、同時に、それらがキューストの回想の筆に成ることを忘れてはならないのである。

それにしても、宮澤賢治が邦訳した「ポラーノの広場」は、そもそも何語で「書きつけ」られていたのだろうか？ その点について作者は何ひとつ触れていないけれども、イーハトーヴォの地に生まれ育ち、長くモリーオ市に在住したとみられる書き手の身の上を想うと、キューストの言葉は「イーハトーヴォ語」ではなかったか、との想像がつく。それは、作者の

愛した北国の大地の言葉といつてよいのかもしれない。作者とともにそれに親しむ宮沢賢治が、たまたまキューストの「いくつかの小さなみだしをつけながらしづかに……書きつけ」た原稿^②を見出して、翻訳したところにいま読者の手許にある「ポラーノの広場」が成立したのである。ついでに訳者についてもひと言触れておこう。書き手と読者のあいだにたつて話を取り次ぐ宮沢賢治も、その意味で大事な役割を担う、といわなければならぬ。「訳述」したのは、彼がキューストの人物と書きものに惹きつけられたからであるはずだ。でなければ多くの労力を費す意味はあるまい。訳出は、原文のもつ趣きを寸分も損わないよう、注意深く行われたことと思う。読者は訳者を信頼して、手許の「ポラーノの広場」にレオーノ・キューストの記述そのものを読んでいいのである。

1 レオーノ・キューストのへいま

では、レオーノ・キューストは「ポラーノの広場」に、何をどのように「誌」したか。それを読むに先立って、「ポラーノの広場」が作者宮沢賢治の作品史のうえで、いつ成立したかをみておこう。といってわたし自身に確認できるわけではない。全集7の「解説」（天沢退三郎）を参照すれば、「この作品の先駆形『ポランの広場』は、一九二四（大正十三）年春までには一応できあがっていた」が、それが「ポラーノの広場」として改作されるのは「一九二七（昭和二）年頃であろうか。このときいったん最後まで書き上げられたと思われるテキストは、第五章までは殆ど本巻本文に同じだが、ラストの「六、風と草穂」の章だけが大幅に異っていた」（傍点引用者）という。「風と草穂」の手入れも問題だが、ここでは傍点の推定

に注意しておきたい。

するとひとつ不思議なことに気づく。キューストの回想する「あの年のイーハトーヴォの五月から十月まで」の「あの年」は、四章に示される警察署の出頭通知の日付けによって、「一九二七年」とわかるけれども、彼がみずからの回想を「誌」すいまは、「それからちやうど七年たった」時点、一九三四年にはかならない、というのがそれである。したがって「ポランの広場」を改作したとき、作者は、まだ世に存在しないはずの、キュースト作・宮沢賢治訳の「ポラーノの広場」を、どこかから取りだしてきて、自己の作品史に据えたことになろう。だからこそ不思議と感ぜられるのだ。それは、いつか「書きつけ」られるべき物語をへ先取りする営みといえようか。あるいは、レオーノ・キューストのへ身代わりとなって「ポラーノの広場」を創る行為であるのかもしれない、とも思う。先に、書き手と訳者の名が物語の冒頭に置かれるのは、「ポラーノの広場」の成立状況を明らかにする必要の、作者にあったためとみたのだが、その情況は、誰が「誌」し誰が「訳述」したかにとどまらず、キューストのへ先取りしないしはへ身代わりとしての物語の成立という事態をも、含むものであることを、ここに確認しておきたい。作者が訳者を自身と同名の人物としたところに、書き手と読者のあいだに身を置き、レオーノ・キューストに代わって話をへ取り次ぐ役割をみずからに課する、宮沢賢治の意識が、すけてみえるようである。

さて、作者のへ先取りした「ポラーノの広場」を、キューストはいかに「誌」したか——の問題にかえろう。一読して誰の眼にも明らかのように、そこでキューストはまずへまえがきを書き、続いておのれの体験を六章にわたって回想したうえで、最後にへあとがきを「誌」している。

へまえがき」の終わりの一節、「では、わたくしはいくつかの小さなみだしをつけながらしづかにあの年のイーハトーヴォの五月から十月までを書きつけませう」と、へまえがき」のはじめの一行、「それからちやうど七年たったのです」とが、読者の注意を促すはずだ。「いくつかの小さなみだしをつけながら」とあるように、続く回想の六つの章は順に「一、遁げた山羊・二、つめくさのあかり・三、ポラーノの広場・四、警察署・五、セシター市の毒蛾・六、風と草穂」の小見出しをもつ。三のそれと物語の題との一致が気になるが、双方の指すものはおそらくおなじではなからう、ということ、二の「つめくさのあかり」はクローバーが一斉に花開く初夏の、五の「セシター市の毒蛾」はそれが集団発生する夏の、六の「風と草穂」は章中の一節、「俄かに風が向ふからどうと吹いて来て、いちめんの暗い草穂は波だち、私のきものすきまからはその冷たい風がからだ一杯に浸みこみました。／「ふう。秋になったねえ。」わたくしは大きく息をしました」と見合せて初秋の候を、それぞれに告げる小見出しにほかならぬことを、指摘しておきたい。

へまえがき」冒頭の「それから……」の「それ」は、六の伝えるべき事をさす。その詳細はのちに読むことにして、ここでは「風と草穂」の書きだしの一行に眼を留めよう。「九月、一日の朝わたくしは旅程表やいろいろな報告を持ってきまつた時間に役所に出ました」以下その日一日のでき事を、キューストはこの章に「誌」すわけだが、この何気ない書きだしによつて、すでに、季節は六で秋を迎えたことがわかるとともに、そう「誌」すいまの彼、「あの年」一九二七年の「イーハトーヴォの五月から十月まで」を回想するレオーノ・キューストは、「それからちやうど七年たった」一九三四年の初秋、九月のはじめに、ペンを手にしていることが、確認で

きよう。いや、いまみた傍点の一語、「端数やはみ出しのないさま。ぴったり」の意を表わす「ちやうど」を意識すれば、へまえがき」の記されるいまを、より正確に九月一日と認めていいのではないか。すると、「昨日」キューストが「一通の郵便」を受け取ったのは、八月三十一日のこと。六章にわたる故郷の回想、原稿用紙で「八十五枚」を数える「ポラーノの広場」を綴るには、キューストがどれほど早書きであるとしても、数日を要したはずだ。そして、それを書きあげようとしたところに、思いがけず故郷からの便りが届く。なかを開いて、厚紙に印刷された歌詞つきの「楽譜」、『ポラーノの広場のうた』を手にしたキューストには、感慨深いものがあつたに違いない。自身も「譜」に合わせて「歌」を口ずさみながら、キューストは、遠く離れた故郷の友人たち、ファゼーロやロザーロやミーロなどの歌声を耳にし、みな面の影をなつかしく憶い浮かべた、と思う。

ちなみに、「楽譜」を受け取ったことがきっかけとなつて、キューストに回想をもたらした、「ポラーノの広場」の出来をみたのだ、と解する読者もあるだろう。わたしははじめはそのように考えたけれども、物語の成立に必要な時間を考慮すると、その読みには無理がともなうのに、気づく。「ローマは一日にして成らず、舞い込んだ「一通の郵便」と「ポラーノの広場」の成立とのあいだは、「昨日」の今日、というわけにはいかなのである。だからキューストが「そのころ」を、「あの年のイーハトーヴォ」を憶いだすのには、別のきっかけがなければならないが、それが何かは明らかでない。あるいは、へまえがき」の一節が告げる、「いまこの暗い巨きな石の建物のなか」に彼がいるという事態そのものが、それなのであろうか。もっぱら七年前の過去の方に、眼と心とが向けられているへまえがき」のなかで、ただひとつ「いま」のおのれが生きる現実に触れるキ

ユーストのこの一節は、それゆえ読者の眼をひく。わたしもそこに、孤独と寂寥の領するキューストの日々を想う。色にすれば灰いろのひとり暮らしのなかで、ふと、光と風と夢に恵まれていた故郷の生活の記憶がよみがえったとしても、不思議ではあるまい。

現在レオーノ・キューストが身を置く「石の建物」は、〈あとがき〉によると、「友だちのないにぎやかながら荒さんだトキーオの市」にある新聞社のビルらしい。続いて「はげしい輪転器の音のとなりの室でわたしの受持ちになる五十行の欄になにかものめづらしい博物の出来事をうづめながら一通の郵便を受けとりました」とそこに記されているので、推察がつく。しかも、「博物」関係担当の記者として新聞社に勤務するキューストは、伴せな境遇にいないことを、傍点の言葉が証明してくれるだろう。だから……といま一度くり返しておこう、「あの年のイーハトーヴォ」が回想され、紙面の担当欄を「うづめ」る仕事のかたわら、「ポラーノの広場」が「書きつけ」られるのだと。「博物」とは「生物・地質・鉱物学などの総称⁽⁵⁾」である博物学のこと。キューストがその関係の記事を受け持つ記者になったのは、もともとそれに興味をもち、「モリーオ市の博物館に勤めて」、「標本の採集や整理」に携わり（〈まえがき〉）、「イーハトーヴォ海岸地方」に出張を命ぜられて、「その六十里の海岸を町から町へ、岬から岬へ、岩礁から岩礁へ、海藻を押葉にしたり、岩石の標本をとったり、古い洞穴や模型的な地形を写真やスケッチにとったりした（五、センダード市の毒蛾）」という経歴の持ち主だからにはかならない。「荒さんだ」つまり人間味に欠けた、うるおいのないトキーオ市で、「友だちのない」暮らしを続けるキューストにすれば、豊かな知識をいかせる記事を書くこと自体、せめてもの救いであったのかもしれない。

2 キューストとは〈誰〉か

〈あとがき〉にキューストは、回想の年、一九二七年の故郷の情況が至り着いたところを受けて、次のように「誌」す、——「ファゼーロたちの組合ははじめはなかなかうまく行かなかつたのですが、それでもどうにか面白く続けることができたのでした。私はそれから何べんも遊びに行ったり相談のあるたびに友だちにきいたりしてそれから三年の後はたうとうファゼーロたちは立派な一つの産業組合をつくり、ハムと皮類と醋酸とオートミルはモリーオの市やセンダードの市はもちろん広くどこへも出るやうになりました。そして私はその三年、目仕事の都合でたうとうモリーオの市を去るやうになり、わたくしはそれから大学の副手にもなりましたし農事試験場の技手もしました」と。先の傍点の個所から、「産業組合」設立は一九三〇年とわかるが、あとの傍点の「その三年目」とはいつか。それはやはりファゼーロたちが努力をかさねた「三年」間の「その三年目」をさすとみられよう。だからファゼーロたちの願いが実った「その」年に、キューストはモリーオ市を「去るやうに」なったわけである。

「それから」の彼は、大学の副手や農事試験場の技手をつとめた、という。その場所は特定しがたいが、五の出張先での情況を告げるくだりのあとにある一節、「そして八月三十日の午ごろわたくしは小さな汽船でとなりの県のシオーモの港に着きそこから汽車でセンダードの市に行きました。三十一日わたくしはこの理科大学の標本をも見せて貰ふやうに途中から手紙をだしてあったのです」に眼を留めると、センダード市である可能性を無視できない。レオーノ・キューストという人物に、「理科大学」側は

直接に、農事試験場側は大学を介して、関心をもったことは、充分に有り得る事態だろう。もつともそれぞれにどれほどの期間在職したかは、はっきりしない。としても長く腰を落ち着けるまでにいたらなかったのは、確かなようだ。副手あるいは技手は、正式の契約ではなく、臨時の雇用であったとも考えられよう。「そして」、キューストはいつの年にかトキオ市に姿を現わし、新聞記者となって現在を迎えているのである。

そういうレオーノ・キューストの経てきた途をふり返ってみると、彼にはなにか深い哀しみの陰影^{かげ}がつきまとっているように想われてならない。

モリーオ市を離れてから「いま」にいたる四年間、彼はどこにも自身の「居場所」を、慰めと癒しと休らぎと、そして生きる喜びとの与えられる空間をえられぬままに、日々を過^{すご}してきたのではないか、セングード市で副手になっても、技手をして、「そして」、トキオ市の「荒^すさんだ」街で新聞社につとめてみても、自分の「居場所」をもたない——という点では、キューストも、あの「旅のガドルフ」、「ガドルフの百合^{ゆり}」の物語の主人公にひとしい。⁽⁶⁾地質や鉱物に興味をもち、調べて歩くのが好きなどころも、よく似ている。しかしガドルフとは違って、日がな一日街道の旅を続け、次の日もそれをくり返すわけではない。「旅に生き、旅を栖^{すま}とする存在⁽⁷⁾」ではないのである。「居場所」をもたないのは、もともと無いのではなく、あったものを無くしたのである。そこに、レオーノ・キューストとは「誰」なのか——をめぐって、見のがせぬ問題がひそんでいる。

先に触れたとおり、レオーノ・キューストはモリーオ市の「博物館」につとめていた。今でいえば地方公務員だったわけで、地位こそ「十八等官」(のちに昇格して十七等官となる)と低く、「俸給もほんのわづかで」あったが、「受持ちが標本の採集や整理で、生れ付き、好きなことでしたから、

わたくしは毎日ずるぶん愉快にはたりました」と、へまえがきにある。上司の受けもよく、同僚との関係もうまくいっていたことは、回想の「あの年」の七月に「北極熊剝製方^{ほくきよくまはくせい}をテラキ標本製作所に照会の件」ほかの仕事⁽⁸⁾を次々とこなし、翌月「慰勞休暇」に代えた長期の出張命令を所長から受け取ったときも、かげでとやかく言うものはなかったので、明らかだろう。「それほどわたくしが所長にもみんなにも働いてゐると思はれてたのか、ありがたいありがたい」と、キューストがすなおに喜べる情況だったのである。

一方、「そのころ」競馬場を植物園に造り変える計画があつて、「その景色のいゝまはりにアカシヤを植ゑ込んだ広い地面が」、附属の建物とともに市の所有となつたので、キューストは、「宿直」という名目で「その番小屋にひとり住む」こととなり、「月賦で買った小さな蓄音器と二十枚ばかりのレコード」を携えて、移転した、という。それはもちろんみずから求めての動きにはかななるまい。レコードの曲目がわかればいいのだが、ともかく素晴らしい音楽をすきなときに聴ける、しかも美しく展^{ひら}げた風景に恵まれた「栖^{すま}」を得て、キューストの生活は、社会的にも個人的にも安定したものであつたはずだ。新たな住居で山羊を飼つた彼の日常がそこに、「毎朝その乳をしぼってつめたいパンをひたしてたべ、それから黒い革のかばんへすこしの書類や雑誌を入れ、靴もきれいにみがき、並木のポプラの影法師を大股^{おほまた}にわたつて市の役所へ出て行くのでした」と回想されている。たっぷりした夜の休息ゆえの爽快な眼覚めと新鮮な朝の食事と、そして活力に満ちた出勤にはじまる日々を、なつかしく憶いだす書き手の心情が、一文の背後にすけてみえる。のみならず、飼つた山羊がにげだしたおかげで、キューストはファゼーロほかの、「ポラーノの広場」を求める若

者たちと識り合えたことが、忘れられてはならない。回想は、「ファゼーロとロザーロ、羊飼のミローや顔の赤いこどもたち」とのかかわり、そのなりゆきをたどるところに、焦点をおいているのだから。

このように、働き甲斐のある仕事と、親しい友人たちと、何よりも帰るべき自身の〈居場所〉とが存したことを、確認しておきたい。そこには、ダンテ・アリギエリが「さながら、われは零落の身を恥らひて／貧しさを掩はむとするなれの果、／おもてには快樂をよそひ、／心には悩みわづらふ」とうたったような情況は、何ひとつなかったのである。にもかかわらず、キューストがやがて故郷を離れることになったのは、どうしてだろう？ 彼自身は〈あとがき〉に「仕事の都合でたうとうモリーオの市を去るやうになり」と抽象的に触れるだけなので、事情の詳細はつきとめがたない。「仕事の都合」とは何か、「博物館」を辞めたのは、不都合があつて辞めさせられたのか、それとも嫌気がさして自分から辞めたのか。しかし、回想の範囲からは、そうは考えられない。あるいはほかに条件のいい職場があつて、転職を求めたのか。しかし〈あとがき〉には続いて「わたくしはそれから大学の副手にもなりましたし……」とあつて、「博物館」からただちに「大学」へ移つたとは思えない。しかも故郷を去つたあと、回想を「書きつけ」、『ポラーノの広場のうた』の「楽譜」を手にするいまにいたるまで、一度もモリーオ市に帰っていないのだ。さまざまに想いめぐらすと、離郷の謎は深まるばかりである。

いまのレオーノ・キューストについて、天沢退二郎は「解説」⁽¹⁰⁾に、「キューストはやはり、大都会の新聞社の片隅にひとり孤独な《もの書き》仕事を営んでいる」人物で、彼に「出来る最大のこととは、《いくつかの小さなみだしをつけながらしづかに》この物語を《書つけ》ることだけだった

のである」と説く。なるほどと思う。モリーオ市からははるかに遠いトキーオ市にひとりで暮らすキューストの姿を、鮮やかに浮かびあがらせる指摘だ、と思う。わたしのキュースト像の形成に、それが強い刺激を与えてくれたことを、ここに明らかにしておかなければならない。とともにわたしは自分の刻むキュースト像に、ひとつの影をつけ加えたい——事情はわからぬとしても、故郷を離れ、異郷にさまようことを余儀なくされたもの、〈故郷喪失者〉のイメージを。そのわが身のなりゆきを、「心には悩みわづらふ」ゆえに、彼は離郷の事情を詳しく記そうとしないのではないか。

故郷の喪失とは、わが身におけるその〈死〉を意味する。したがって哀しみも、肉親の死に較べられるほどに深い。「大都会の新聞社の片隅」で「孤独な《もの書き》仕事」に携わるレオーノ・キューストが抱くのは、ほかならぬその哀しみだ。そういう彼の境涯は、盛岡中学で宮澤賢治の先輩だった石川啄木のそれに近い。啄木もまた、二十一歳で故郷浜民村を去つたのち、渡道して函館・小樽・釧路の各地を転々とし、上京して朝日新聞社の校正係となり、二十六年の生涯を終わるまで、一度も故郷に帰っていない。代わりに「病のごと／思郷のこころ湧く日なり／目にあおぞらの煙かなしも」「石をもて追はるることく／ふるさとを出でしかなしみ／消ゆる時なし」ほかの多くの望郷歌を含む歌集『一握の砂』⁽¹¹⁾を、刊行している。キューストにも、追放の思いこそなかったろうが、痛切な離郷の「かなしみ」とともに、抑えがたく「思郷のこころ」の「湧く日」があつたに違いない。「ポラーノの広場」は、啄木の『一握の砂』に当たる、キューストの述作といえるだろう。もつとも、啄木にあつては、たまたまほだけた歌心が感興のおもむくままに動いて、堰を切つたように歌が溢れだしたのだが、キューストは少し違って、還らぬ故郷へのなつかしさとかなしみ

とを噛みしめつつ「しづかに」、回想の情景を筆にしたのであった。

3 物語の「ヘトキ」をめぐる

「ポラーノの広場」でレオーノ・キューストは、モリーオ市にいたときの自分の暮らし振りと・故郷の自然のたたずまいおよび「いっしょになった」人びとの面影と・いま自分のなすべきことをへまえがき」に、歳月の経過と・その間のファゼーロたち、「そして」自身のなりゆきと・「昨日：一通の郵便を」受け取った次第とをへあとがき」に、すなわち三つのこととをそれぞれに「誌」す。ならば物語の本体、回想の六章はどうなのだろう？ それを確かめるには、まず物語におけるトキの推移の在り方を押さえておくことが、必要になる。

「あの年のイーハトーヴォの五月から十月」、正確には九月までが、「ポラーノの広場」の物語を流れるトキであった。初夏から初秋へと季節の移るイーハトーヴォの「あの年」が一九二七年であることも、その根拠とともに、すでにみた。四で届いた警察からの召喚状の日付けに、文言とあわせていま一度注目しておこう――

イ警第三二五六号

聴取の要有之本日午後三時 本警察署人事係まで出頭致され度し

一九二七年六月廿九日

第十八等官 レネーオ キュースト殿

イーハトーボ警察署

書式のとおり引用してみたのだが、召喚すべき人物の名前も原文のままである。なぜ「レネーオ キュースト」なのかはわからない。⁽¹²⁾ としても、

日本のお役所式の文章の綴られた公文書の日付けに西暦の使われている点
が、イーハトーヴォの警察署らしくて、おもしろい。その一九二七年六月二十九日、物語のなかの動かしがたいこの日付けが、トキの推移の状況を測る基準となる。あとはそれが何曜日かをつきとめれば、読者は、物語の一九二七年のカレンダーを作成することができるはずだ。都合のよいことに、「ところがその次の次の日のひるすぎでした」と四の冒頭に、「その」がさす前章の一日を「それからちやうど五日目の火曜日の夕方でした」と三のおなじく冒頭に、キューストは「誌」してくれている。彼自身意識してそう書いたかどうかはともかく、双方の記述を結びつけると、日付けと曜日とはおのずから特定できる仕組みになっているところが、ありがたい。

こうして、四でキューストの警察署へ出頭した六月二十九日は、「わたくしはこれこそはもうほんもののポラーノの広場だと思ってしまひました」とキューストのいう、モリーオ市近郊の祭の催されている場所をファゼーロやミローと一緒にたずねた、三の六月二十七日「火曜日」の夜の「次の次の」木曜日にはかなならぬことが、明確になるだろう。のみならず、三冒頭の「それからちやうど五日目……」の「それ」が受ける、二のでき事、すなわちキューストたちの「ポラーノの広場」の探索が行われた宵は、逆算して六月二十三日の金曜日であることも、確認できよう。へポラーノの広場」を求める彼らの動きが六月下旬に集中しているさまも、そこにかがえるわけだが、試みに「ポラーノの広場」のカレンダーを編んでみると、ほかに興味深いことがらがその上に浮かぶのに気づく。

ひとつには、その日付けが実際の暦よりも、一日あとへズレていると

いうこと。したがって、召喚状の示す一九二七年はイーハトーヴォの年代であって、日本のその年・昭和二年ではない、とみななければならない。昭和二年六月二十九日は木曜日ではなく、水曜日なのだ。その事情は、キューストのいま、「はげしい輪転器の音のとなりの室」にいたるときについても、変わらない。だからこそ昭和二年の宮澤賢治は、「ポラーノの広場」に、昭和九年ならぬ一九三四年を自由に（先取り）することができたのではないか。ふたつには、キューストの記憶ちがいが判明すること。警察での事情聴取の際、ファゼーロと知り合っていたいきさつを訊かれた彼は、最初の出会いの時点を「五月のしまひの日曜、二十七日でしたかな」と答えているが、カレンダーはそれは二十八日であることを、示している。はじめからファゼーロ失踪事件の容疑者扱いをされているための驚きと怒りとが、記憶を混乱させたものか、と思われる。けれども聴取する警部の方も、「うん。二十七日。どこでだ」と、誤りに気づかず次の質問に移っていく。もし気づいたらキューストへの疑惑は一挙に強まって、たちまち手厳しい追求がなされたろうに、どうしたわけだろう？　すると、間違ったのは彼らではなく、作者その人であったかとの（疑惑）が読者に生じる。

いまひとつは、一と二のあいだのトキの経過をめぐって、キューストの「誌」すところが実情にそぐわない、ということ。一のファゼーロとの出会いは、先程のキューストの言葉のとおりで、一の冒頭にも「五月のしまひの日曜でした」とある。そして先に確認したとおり二は六月二十三日宵のでき事を伝えている。その間にはひと月近くのトキが過ぎていくにもかかわらず、キューストは二を「それからちやうど十日ばかりたって、夕方わたくしが役所から帰って両手でカフスをはづしてゐましたら……」と書きだすのである。そのとおりなら、二は六月の八、九日ごろのこととなっ

て、物語の進行に大きな矛盾を来す。せめて（二十日ばかり）とあればまだしも実情に近づくけれども、これではどうにもならない。キューストの誤認なのか——いや、ふたたび「本文について」の指摘する、草稿における「固有名詞」表記の不統一を参照すると、責任はやはり、「ポラーノの広場」を書き急いで、作中事実の再検討が充分でなかった、作者宮澤賢治に帰するといわなければならないまい。

それはそれとして、章から章へと時間がとぶのは、一と二のあいだだけではない。四から五にかけておなじくひと月あまりのトキの流れ去ることが、物語に即して確かめられる。四の終わりに、警察署を出て帰宅した「その晩から毎晩毎晩野原にファゼーロをさがしに」出かけたことを告げる一段があり、五のはじめに、「そしてだんだん暑くなって」きて、「七月いっぱい」が過ぎ、「そして八月に入」った次第が、短く告げられているからだ。ちなみにキューストは五で、出張命令を受けた八月二日のでき事と、「次の朝」「番小屋にすっかりかきをおろし」てモリーオをあとにしてからの旅先での体験とともに、セランダード市に着いた八月三十日の午後から夜にかけて出会ったことがらを詳しく伝え、モリーオ市に帰った次の日、九月一日の状況を六のすべてに「書きつけ」ていることを、再確認しておく。

というわけで、レオーノ・キューストは、回想裡に流れるトキのなかの三つの時点に照準を合わせて、想いに浮かぶ情景を「誌」したことが、したがって、回想の六章は（ままえがき）や（あとがき）と同様、三つのパートに分かれていることが、明らかにするはずである——「イーハトーヴォ暦」一九二七年の、（一）五月第四日曜日の「一、遁げた山羊」の章と、（二）六月下旬の「二、つめくさのあかり」「三、ポラーノの広場」「四、

警察署」の三章と、(Ⅲ) 八月中および九月一日金曜日の「五、センドード市の毒蛾」⁽¹³⁾「六、風と草穂」の二章と。そこに、回想の六章もまた、「鳥の北斗七星」とひとしく「三部構造」をもつことが認められていい。

キューストが、「遁げた山羊」を連れて来た「一人の頬の赤い、チョッキだけ着た十七ばかりの子ども」ファゼーロから、へポラーノの広場の話をはじめて聞いたという(I)は、物語の「発端」であり、へ広場をめぐる三つの動き——ファゼーロとともに、「つめくさのあかり」をたよりにそれを探し・伝承の「へ広場」とは似て非なる「ポラーノの広場」に行き着き・その直後にファゼーロ失踪の件で「警察署」に出頭した、というキューストの動向を伝える(Ⅱ)は「展開」、出張旅行の終わりの日に「センドード市の毒蛾」の被害を眼にしながら、はからずもデステウパーゴに出会い、翌々日の夕暮れモリーオ市の自宅でファゼーロと再会して、「風と草穂」の「秋」のなかに彼らの目指す「新しいポラーノの広場」を見に行く次第を告げる(Ⅲ)は「結末」——と受け留められるだろう。

最後の章の明らかにするこの「ポラーノの広場」こそ、回想記総体のタイトルが、一の「昔ばなし」にある「へ広場」と、三の小見出しの指す「へ広場」とを、視野のはしに置きながらも、それらを超えて真直ぐにみつめるものにはかならぬことを、ここに断わっておきたい。なお、キューストがイーハトーヴォで「いっしょになったたたくさんのひとたち」のなかで、とくに強く印象にのこるのが、ファゼーロとポーガント・デステウパーゴのようで、だから回想裡に自身を含めた三人の影が大きく浮かびあがること⁽¹⁴⁾「ポラーノの広場」の題下にキューストは、モリーオ市からセンドード市、そしてトキーオ市へと、三度、生活の場を移していることも、記憶されていること⁽¹⁵⁾。そのようにみっていくと、レオーノ・キューストは、回想の諸情景を「誌」

すに当たって、想い浮かぶままを漫然と筆にしたわけではなく、叙述の精密と簡略の度合をよく測り、物語としてのリズムを整えて興味深く読めるように配慮しつつ、その意味でも「しづかに」原稿用紙に向かっていたもの、と思われる。それゆえ、キューストもなかなかの「物書き」、宮澤賢治に劣らぬ物語作者の素質をもった人物と見做せるのではなからうか。へまえがき」の終わり、仕事の開始を告げる一節が「では、わたくしは……」と書きだされているところに、気をひき締めて回想の執筆にとりかかろうとする作者、キューストのひそかな心構えを、わたしは見いだす。そこで、三部のそれぞれがどのようなかを、以下にたどることにしよう。

4 へイーハトーヴォ暦 一九二七年

五月二十八日のこと・「発端」

まず「発端」——「五月のしまひの日曜」にキューストがファゼーロと「知り合ひになった」いきさつは、どうか。その日曜日の朝、「六時」を告げる「市のはづれの白い教会の塔」の鐘の音で眼覚めたキューストが、山羊の「遁げ」だしたのに気づいて探しに出かけるところから、事ははじまる。山羊を手に入れたときの記憶が動いて「この前山羊が村の人に連れられて来た路をそのまま野原の方へ」とキューストを導き、気がつくとは「町から西南の方の村へ行くみち」を、たどっていたという。そこに「そしていつかわたくしは」その「みちへはひびつてしまつてました」と記された一行が、読者の眼をひく。傍点の個所に注意すると、それはなかなば無意識の動きとみられ、どうしてそうなのが気になるだろう。

「みち」は、警察の事情聴取に答えて口にした「教会の横から、村へ出る道路」であって、ただなんとなく、そちらへ足を踏み入れたのに、その先にファゼーロとの出会いが待つ、という。それは偶然のなりゆきにすぎないのか。〈結末〉の示す、キューストの回想に印象的ないまひとつの出会い、センドード市におけるデステッパゴとのそれも、「私は一軒の床屋に入りました」とある何気ない行動がもたらしたものであることを考慮すると、たんなる偶然と片つけて済ますわけにはいかなくなる。やはりキューストの意志を超えて、眼にみえぬ何かの力が働いて、進むべき方向へ彼を動かすという状況を、想わないわけにはいかない。ただし、その何かの实体をうかがう手がかりは、残念ながら「ポラーノの広場」には見いだせない。キュースト自身おのれにまつわる〈不思議〉に気づいていないためだろう。〈発端〉の示す白い鐘塔をもつ教会も、彼の日常を彩る一点景として回想裡に置かれていただけなのだ。

その「教会の横」をとおって、「村」への道をたどるキューストは、最初に大勢の「百姓のおかみさんたち」に行き逢い、山羊の行方をきく。みな一様に「黒い着物に白いきれをかぶっ」て、「バイブルも持ってる」とあるので、「教会」はカトリック教会で、一行は朝のミサにあずかるためにゆくとするとわかるのだが、誰も山羊は見かけなかったとの答えが返ってくる。では探しても無駄のようだ、「もう戻らう」と思いながら、「まあ散歩のつもりでもすこし行かう」と歩きかけたとき、今度は、若者と少年が「スコープをかついで」やって来るのに気づき、何の期待もせず「みかけだけにたづねて見よう」と、事情を話したところに、三度目の正直で、にげた山羊を連れた「十七ばかりの子ども」が姿を現わす。それが誰かをすぐに認めた若者と少年は口々に、「ファゼーロだな、けれども山羊かな

あ。」山羊だよ。あゝきつとあれだ。ファゼーロがいまごろ山羊なんぞ連れてあるく筈ないんだから」と言う。その口ぶりからすると、二人はファゼーロをよく識っているらしい。

ファゼーロとの初対面が、「たしかにそれは山羊でした」の一文で幕をあけるのに、無理はあるまい。この場のキューストの関心事は、山羊の行方だったのだから。そのようにしてはじまる出会いの次第を、彼の筆によってみておこう——「たしかにそれは山羊でした。けれどもそれは別のので売りに町へ行くのかも知れない、まああの指導標のところまで行って見よう、わたくしはそっちへ近づいて行きました。一人の頬の赤い、チョッキだけ着た十七ばかりの子どもが何だかわたくしのらしい雌の山羊の首に帯皮をつけてはじを持ってわらひながらわたくしに近づいて来ました。どうもわたくしのらしいけれども何と云はうと思ひながらわたくしは立ちどまりました。すると子どもも立ちどまってわたくしにおじぎしました」。文中の「指導標」は教会案内の指標かと思われるが、明確ではない。それよりも、この場面で興味深いのは、キューストが「近づいて行き」、ファゼーロもまた「近よって来」て、同時に「立ちどまり」、たがいに顔を見交わすという、文字どおりの〈出会い〉が果たされている点だろう。以後のはこびで二人が会うときは、二・三・六各章のはじめの示すとおり、かならずファゼーロの方からキューストの住まいを訪れて誘いだす、とのカタチをとって、その逆はまったくないことを思い合わせると、初対面の在り様の違いが際立つ。文字どおりの〈出会い〉はキューストに山羊を求めるといふ積極的な姿勢があるから成りたつたはずだが、それとは対照的に、〈ポラーノの広場〉を目指す一連の動きにおいて、彼は受身の立場に終始することが、注意されよう。

挨拶のあとに、ファゼーロの問い掛けとキューストの応答との導く、二人の対話の部分が続く。皮切りのファゼーロのセリフ、「この山羊はおまへんだらう」は、それがキューストの飼う山羊であることを知っていたかと思わせるが、そうではない。「たった一足で迷ってるた」という、いわゆる「迷羊」に匹敵するその在り様と、普段は見かけない人物の何かを探すらしい印象とが結びついて、口にされたものだろう。初対面の、しかも年うえの人間に対するセリフとしては、言葉遣いが乱暴にすぎようが、「野人礼に倣わず」で、野育ちの素朴な少年のごく自然な口ぶりと、受け留めるべきだと思ふ。それに応じたキューストの「さうらしいねえ」以下、二人のやりとりは、テキストで四ページにわたって重ねられていく。話し合おうちに、互いに心を許せる存在を相手に認めて、親しみを抱くにいたる情況が、そこに求められていい。

長い対話は、山羊の受け渡しと、少年の「探す」ものと、ファゼーロの身の上とをめぐって、続く。キューストがお札に磁石のついた銀の「時計の鎖」をさし出すと、言うつもりがなかった自分の探しものごとを、思わず口にしてしまうファゼーロの在り様が、おもしろい。失敗したとは思ふものの、「しばらくちうちよし」たのちに「思ひ切ったらしく」、「ポラーノの広場」と言うところに、キューストへの信頼感の芽生えを読みとることが出来る。ためらいはどれ程のあいだであったか。数十秒か一分、あるいは一分三十秒くらい？ いずれにしてもこの「しばらく」の間は、ファゼーロの裡に、自分の秘密を明かすべきか否かの葛藤が生じ、キューストを信頼していいのかどうかとの不安に心が揺れる、重苦しいひとときであった。しかしついに信頼感が彼を制し、重苦しさから解放されて、「ポラーノの広場」の名を口にしたとき、ファゼーロは確実に、本当の意味で、

キューストに近づき、傍らに立ったのである。

そのときキューストもまた信頼にこたえて、話を真面目に受け留め、記憶にある「昔ばなし」の「広場」のことを憶いだしつつ、「あゝさうだ。わたしも小さいとき何べんも聞いた。野はらのまんなかの祭のあるところだ。あのつめくさの花の番号を数へて行くといふのだらう」と応じており、山羊を介して出会った二人のあいだに、「ポラーノの広場」を軸とする絆の結ばれたことを、読者はそこに確認できよう。実利実益をもっぱらとする世間の大人たちなら、「思ひ切って」口にされたファゼーロのひと言を、頭から馬鹿にしてまともにとり合おうとはしなかったはずで、だからこそ彼は、秘密を明かすのを「しばらくちうちよし」たのに違いない。だが、そのハードルをファゼーロが越えたおかげで、事態はなるようになり、ひいては読者も、二人に即いて「広場への道」をたどることが出来るのである。ファゼーロの迷いと思ひ切りは、「ポラーノの広場」の進行に重要な意味をもつ、とみなければならぬ。

「昔ばなし」の伝える「広場」は、中国説話の桃源郷とおなじく、ユートピアであろう。「Utopia」とはそもそも no-where ใดにもない場所をさす。ところがファゼーロは、それが「どうもこの頃もあるらしい」のに、野原を探してもわからない、「イーハトーヴォの野原は広いんだよ。霧のある日ならミ、口だつて迷ふよ」と言い、キューストは、「お札に」地図の提供を申し出る——というカタチで、「発端」はその役割のひとつ、問題の提示を果たす。あとは「展開」と「結末」とが引き継いで、いかなるなりゆきをたどり、どこへ落ち着いたかを示すだろう。なお、いまのセリフに「ミ、口」の名前の見いだせる点を、憶えておきたい。続いてキューストが「きみはファゼーロって云ふんだね」と「子ども」の名前を確かめ、

それを機にファゼーロの身の上が話題となったところに、「山猫博士」とあだ名される県会議員の「ポー、ガント、デステッパゴ」の名前も挙げられているからである。

ファゼーロは「主人」に雇われて農作業に従事する少年、両親はすでに亡くなって、「姉さん」とふたり「旦那とこ」で暮らしているという。おそらく屋敷のなかの納屋か作業小屋の一部を与えられているのだろう。家庭的に恵まれない境遇に在るとわかるが、だから彼は自分で強く、しっかりと生きなければならぬのだ。同時に気になるのは、姉をめぐる事情、ファゼーロの「姉さんは山猫博士のとこへ行くかも知れないよ」と、キューストの「あいつは悪いやつだぜ」のふたつのセリフがおおすそれである。この情報は、若い女性の身にやがて悲劇が起るとの予測を、読者にもたす。そこで読者は、ファゼーロとともに、彼の唯一の身の内うえにも関心を寄せることになるわけだ。その要請に応えるかのように、〈展開〉の二のはじめに、ふたたび姉の身の上が触れられ、章の終わり、本人自身がロザーロと呼ばれる「うつくしい娘」として、姿を現わすはずである。ファゼーロとキューストの対話は、しかし、不意に聞こえた怒鳴り声、「おい、こゝら何をもぐもぐしてゐるんだ」をともなった、「年老りの頑丈さうな百姓」の登場によって、終わりを告げなければならない。帽子をかぶり革の鞭を手にしたこの人物は、おのれがただの「百姓」ではなく、他人を支配し、使役する〈大物〉であることを誇示する人間、上にへつらい下には苛酷に当たるもの。いうまでもなくファゼーロたちの雇い主で、さっそく少年を仕事に追いたて、さらにその後姿に向かつて「革むちをパチツと鳴ら」すという仕打ちには、使用人を家畜同然と心得ている姿勢を示す。それを認めたキューストが思わず抗議の声をあげると、相手は、これは馬

追いの鞭だといって、「わたくしの顔の前でパチツパチツとはげしく鞭を鳴らし」てみせた、という。「いま争ふときでないかと考へて」、燃えあがる怒りをこらえ、その場を離れるキューストの動きは、やがて「争ふとき」のくることを、暗に物語っているだろう。傲慢なこの雇い主、労働力搾取の狡智と非道さにおいて、「オツベルと象」のオツベルにひとしい農場主の、〈発端〉ではわからない名前は、やがてテーモと判明するのだが、ここで注意されるのは、デステッパゴの家が「ぼくの旦那のうちから見え……」と言い掛けたファゼーロのセリフにほからならない。二人が近くに住む——その〈事実〉は、テーモとデステッパゴとが互いの利権を守るために気脈を通じ合える関係に在ることを、物語っていよう。村の有力者と県会議員との癒着の構図、ロザーロの背後にあるのは現在もお見られるそれなのだ。

こうして「一、遁じた山羊」の章には、〈まえがき〉でキューストの想いに浮かんだ「たくさんのひとたち」が、次々に紹介されていく。ただし、紹介は「ベイーハト・ヴォ歴」一九二七年五月二十八日のこと「を具体的に伝えるついでになされているので、そのカタチが不揃いなのは止むを得まい。章の終わりでキューストは自分の山羊に「追ひついてから」、ファゼーロの働く畑の方へ眼を向けている。「ふりかへって見ますと」とあるが、そのとき同時に、〈今日〉の出来ごともしもふり返られたのではなからうか。「遁じた山羊」をたずねて出かけたキューストが、〈戻ってきた山羊〉と一緒にいるところで終わる、というはこびにおいて、この章自体ひとつの完結性をもつ。以後のなりゆきを引きだすきっかけとなった山羊は、「ポラーノの広場」に二度と現われない。〈発端〉でその役割が完了したからである。

〈展開〉の三つの章を読んでまず気づくのは、〈発端〉と同様、登場人物の会話ないし対話の場面が多くみられることである。それは、〈結末〉についても変わらない。たとえば、「四、警察署」の事情聴取の場ではキューストと警部のやりとりが、やはり四ページにわたって続けし、「六、風と草穂」のはじめで、再会したファゼーロとキューストの対話に二ページ、ファゼーロたちの新たな〈広場〉に着いたところでも、みな会話に二ページを費すという具合に回想の六章を通じて、登場人物のセリフの総体がその記述に占める比率はきわめて大きく、「ガドルフの百合」とは異なった、「ポラーノの広場」における〈伝達プロセス〉⁽¹⁷⁾の特色を、そこに求めることができる。「ガドルフの百合」では、物語空間に主人公の声がかえりぬくのはわずかに三度、しかもそれに応じるセリフがないので、対話はひとつも成立していない。そのかわりガドルフの声にならぬひとり言が、語り手の叙述とともに伝達にひと役買うのである。

F・シュタンツェルは、物語情況の伝達には「二つの基本形式、すなわち、物語的形式のグループ（報告、叙述、注釈、語り手によるエッセイ）と、非物語的ないし演劇的形式（会話、ドラマ風に描写された場面）」とがあつて、後者は「主として対話から成り立つが、その対話の中には、ト書きと簡潔な事件報告の機能をもつ物語要素が織り込まれている」⁽¹⁸⁾ことを説く。「ポラーノの広場」にはその「ドラマ風に描写された場面」が豊かなわけだが、それはなぜだろう？ シュタンツェルはまた、二つの形式が古来からの「〈物語〉（*Dei Geschehnisse*）と〈模倣〉（*Mimesis*）の区別」に「照応するもの」で、

「直接的な描写ないしはドラマ風な描写を意味する狭義のミメシスは、小説では本来対話によってしか実現できない」とも記す。⁽¹⁹⁾ ドラマの担うそのような〈模倣〉とは、現実界での人間の行動を秩序立てて〈再現する〉営みにほかならない。⁽²⁰⁾ してみると、「ポラーノの広場」に「対話」による「ドラマ風の描写」の多くみられるのは、キューストが、回想に浮かぶ人物、イーハトーヴォの「あの年」に「いっしょになったたくさんのひとたち」の〈行動の再現〉を目指したためと、考えられよう。その試みで彼は、読者に臨場感を与えようとするとともに、何よりも自身が、モリーオ市と近郊の野原や森に、イーハトーヴォ海岸地方に、センドード市に、現にいるという実感をもとうとしたのではなかったか。

雇い主の介入によって、「ちゃさよなら」「あゝさよなら。ぼくは役所からいつでも五時半には帰ってゐるからね」「え」と、あわただしく別れを告げるのを余儀なくされたファゼーロとキューストが、次に顔を合わせるのは、「イーハトーヴォ暦」一九二七年の六月二十三日・金曜日のこと。したがって、すでに確かめたとおり、「二、つめくさのあかり」の冒頭に「それからちょうど十日ばかりたつて」と記されているのは、書き手の記憶違いであつて、精確には「それからちょうど二十六日たつて」でなければならぬ。再度の出会いまでかなりの日数を要したのは、キューストを邪魔ものと思ひやる雇い主の眼が光って、抜け出す機会を得られなかったからだ、と思われる。その六月二十三日の「夕方」キューストが帰宅して間もなく、「いきなり……戸口から顔を出して」「たう、来たよ、今晚は」と挨拶したファゼーロは、「うちの方は大丈夫かい」と訊かれて、「うん」と「何だか少しあまいに」答えたという。同時に続く対話のなかで、雇い主の実体、名前はテーモで、「あちこち役所へ果物だの野菜だ

の納めてある」農場主であることが明らかにされる点に注意したい。しかもこの場には、ファゼーロより三歳ほど年長の、脚絆きんぱんをつけて「青い皮の上着を着た顔いろのいゝわか者」、羊飼いのミーロも同行しており、呼ばれて物語空間にはじめて姿を現わす。そして三人でキューストの広げた地図の上に、「昨夜」の〈広場〉のらしい「音」の聞こえた地点を押しさえたうえで、揃ってその場所をたずねるために、戸を閉めて出ていく。そのとき陽はすでに落ちて、街はすっかり宵の青さに包まれていた、という。

二はそのあと、闇が濃さをまして「そこらの草も青黴あせどく」見えるようになり、次いで空は「にぶい鋼のいろに変わって」星たちも小さくまたたき、「十六日の青い月」がのぼってからも、しばらく継続される探索行と、それが打ち切られる情況とを伝えて終わるけれども、おのおのの場面は、やはりいくつかの問題点を抱えている。野原へ向かう「小さなみち」のうえで交わされた会話に話題となった、ロザーロの身に迫る暗い影のことがそのひとつ。デステッパゴの要求をめぐって、「姉さんは行きたくないんだよ。だけど旦那だんなが行けて云ふんだ」・「うん、旦那は山猫博士やまねこがこはいんだからねえ」と、ファゼーロはいう。母の「居ない」哀しみを癒してくれる大事な姉の身の上を気遣う心情が、そこにじむとともに、県会議員と結託する「旦那」の姿もはっきりとのぞかれる点が、読者の注意を促す。続いてミーロの明らかにする「山猫博士」というあだ名の由来——「あいつは山猫を釣ってあるいて外国へ売る商売なんだって」も、デステッパゴの人物のいかがわしさをうかがわせて、見逃せない。

次は「つめくさのあかり」。山羊のにげたのはモリーオ市の西南の村であったのに、「音」の聞こえた野原は西北の方にあるらしい。一同がそちらに近づいたとき、「向ふの黒い草むら」のあちこちに「つめくさの花」

の白く浮かぶのを眼にして、ファゼーロは「おや、つめくさのあかりがついたよ」と叫ぶのだが、その情景こそ二の小見出しの指すものにほかならない。したがって、以下の一場、三人がそこに足を踏み入れ、「つめくさのあかり」をたよりに、「音」のする場所を求めて徘徊するくだりに、この章は〈語り〉の照準を定めていることが明らかだ。しかも、一の対話のキューストのセリフ、「あゝさうだ。わたしも小さいとき何べんも聞いた。野はらのまんなかの祭のあるところだらう。あのつめくさの花の番号を数へて行くといふのだらう」を憶いだすと、「あかり」のともった野原で花の数字を懸命に確かめてまわるファゼーロとミーロの動きは、「昔ばなし」の伝えるところをそのままに受け容れている二人の在り方を示すとみられよう。いまひとつ、一のファゼーロのセリフ、「ああ、それは昔ばなしなんだ。けれどもこの頃ころもあるらしいんだよ」も、ここに憶い合わされている。二人のたずねているのは伝承のなかの〈ポラーノの広場〉であって、それが自分たちの身边に〈出現した……〉という、およそ信じがたい情報のもたらす〈不思議〉の感が、彼らを夢中にさせたものと思われる。

にもかかわらずこのくだりには、ファゼーロやミーロとやや異なるキューストの半信半疑の姿勢が、眼につく。一緒に探しながら、彼は花に記された番号に疑いをもつ。花をみつめても「さう思へばさうといふやうな小さな茶いろの算用数字みたいなもの」しかみえず、しきりに数を問題にする二人に向かって、「その数字を数へるといふのはきつとだめだよ」・「なぜって第一わたしは花にそんな数字が書いてあるのだからそればかりの目のましがひだらうと思ふんだ」と言明し、「その音が聞えてきたら」そちらへ行けばいいと提案するのである。キューストだけは、伝承と現実との交差する〈不思議〉に、夢中になれずにいるらしい。少しして

「ぼんやり青白い野原の向ふ」に「セロカバスのやうな顛ひ」が「しづかにしづかに眩やくやうに」起こったときも、なかばそれに惹かれて「まるで昔からののはなしの通りだねえ。わたしはもうわからなくなってしまう」と言いながら、足許で花から花へと移る「黒い小さな蜂」をみつけると、音の正体は蜂の羽音だと「合理的」な解釈を示して、「月が出たので蜂が働きたのだよ」と、二人に説く。けれども、かさねて「ぼおたしかに、トローンボンかバスの音がきこえ」と、さすがにキューストも「不思議」の網にとらえられ、「おもはず身ぶるひし」という。畏れを感じたその在り様をみてみよう——「野原ぜんたいに誰か魔術でもかけてゐるかさうでなければ昔からの云ひ伝へ通りひるには何もない野原のまんなか不思議に楽しいポラーノの広場ができるのか、わたくしは却ってひるの間役所で標本に札をつけたり書類を所長のところへ持って行ったりしてゐることが別の世界のことのやうに思はれてきました」。へまえがき」の明らかにするやうに、音楽をこのうえなく愛した彼、すぐれた音感の持ち主と思われるキューストだからこそ、このとき一挙に日常を離れ、伝承の世界に移り住む想いを抱くことになったに違いない。

そもそも三人が歩きまわったこの夜の野原の在り様、空にはいざよいの月が青く輝き、地上には、つめくさのあかりがともし、甘い「蜂蜜のかをり」が一面に漂って、どこからともなく音楽が聞こえてくる——という情景自体、人をファンタスティックな気分誘うところをもつのではないか。その意味でこれは「ポラーノの広場」に注目されている場面であって、登場人物たちだけでなく、回想するキューストも非日常性を認めて、「つめくさのあかり」の小見出しをつけたのだとわたしは思う。

しかし、その場のキューストが「やっぱり昔の伝説のやうにあかしの番

号を読んで行かなければならない」ことを認め、さらに「広場」の探索行にとりかかろうとする三人の前に、思いがけない事態が起きて、一同は立ち止まらなければならぬ。「足のまがった片眼の爺さん」、ミーロの言い分によれば、「山猫の馬車別当」すなわちデステウパーゴに雇われた馭者の登場。それを伝える「語り」の「その時でした」という独立した、一行の強い響きが、それまでの特別な雰囲気打ち消されたことを、告げている。〈ポラーノの広場〉はあるかと訊かれた爺さんのセリフ、「あるさ。あるにはあるけれどもお前らのたづねてゐるやうな、這ひつくばって花の数を数へて行くやうなそんなポラーノの広場はねえよ」に接すると、誰しも、では「ある」のはいかなる「広場」なのかと、その実体を知りたく思う。だから、その求めに応じる次の章の小見出しは「ポラーノの広場」となるわけである。ところで、お前たちは「広場」に「行けねえよ」と捨てゼリフをはく爺さんの額にかぶと虫がぶつかって大慌てさせるのは、まことに時宜を得た偶発事というべきで、ファゼーロたちに轟然する読者は、快哉をさげふはずだ。怒って立ち去るこの「山猫馬丁」の背に向けて、「るのししむしゃのかぶとむし／つきのあかりもつめくさの／ともすあかりも眼に入らず……」と、得意ののどを披露するミーロが、溜飲を下げた思いでいたのは、いうまでもあるまい。

「ところが」歌声のあとに、ファゼーロの名を呼ぶ「細い高い声」が聞こえて、「うつくしい娘」が姿を現わす。ロザーロの登場。ファゼーロは呼びにきた姉と「旦那のどこ」へ戻り、探索行はおのずから打ち切りとなつて、この夜は「広場」に行き着けずに終わるけれども、代わりにひとつの「清楚な影」——無言のまま、ていねいな挨拶をキューストのもとに遺していったロザーロのイメージ——が、「つめくさの花と月のあかり」の野

原に加わって、ふたたびキューストの夢見ごちを誘い、「ポラーノの広場といふのはかういふ場所をそのまま云ふのだ」と思わせる。二のそういうなりゆきは、注意されている。「きつと五六日のうちにポラーノの広場をさがす」と言っていたミローとも別れて「そのうつくしい野原を胸いっぱいに蜂蜜のかをりを吸ひながら」家路をたどる「わたくし」の裡に満ち足りた想いが流れていたとしても、不思議ではない。

6 おなじく六月二十七日と

二十九日のこと・〈展開〉その二

ミローの言葉どおり、「それからちやうど五日目の火曜日」、六月二十七日の「夕方」、キューストは、〈広場〉の在り処が「わかった」との知らせをもって、意気込んでやって来たファゼーロとともに、またつめくさの野原に向かう。ミローはひと足先に行っていて「ぼくらを迎へに出る約束」だ、という。ファゼーロの設定した目じるしをたどると、「俄かに」もの音が起るのは前回とおなじで、前方に「七八本の木がじぶんのからだからひとりでも出ずやうに青くかどやいてそこらの空もぼんやり明るくなっている」のが見えたところに、ミローが待っていて、「山猫博士も来てゐるやうだ」との情報をもたらす。デステッパゴの登場を知った二人の若者とキューストとが、対照的な反応を示す点に眼を留めておく。「ミローもファゼーロも何か大へん心配なやう」なのだが、「わたくし」は、「一体昔ばなしの通りのことが本当にあるのだらうか、それとも何かほかのとだらうか。山猫博士がここへ来て何をしてゐるのだらうか」と、事実を知りたい〈好奇心〉に駆られ、二人を促して目的地に急ぐ。ファゼーロと

ミローが何を心配したかは明らかでないけれども、自分たちの想い描く理想郷の、俗悪な人物の侵入による破壊を、懸念したのではなからうか。

先程の青く光る木々は、近づく、梢にモールを張りめぐらされた「可成大きなほんの木」だとわかる。その下の〈広場〉に見られる、つめくさや果物のかおりに満ちて、飲物も用意され、楽隊の演奏と踊りの輪と歓声の渦巻く光景は、なるほど人びとの心を浮き立たせるものだが、おなじく「十本ばかりの青いはんのきの木立」のもとの草原に「鹿踊りのはしまり」の伝えるそれ、太陽とはんのきへの祈りとも言ふべき鹿たちの詠唱が続く、魂に沁みいる光景とは、趣きを異にしていて、しかも〈広場〉の中央の「卓」を「黄いろの縞のシャツと赤皮の上着を着た肩はどのひろい男」がひとり占めにして、傲然と酒をのんでいるのである。それこそ噂の人物、ほかならぬデステッパゴであって、そばにはテーモの姿もみえる。するとこの祭の場所、「ポラーノの広場」もな、お気の毒だがデステッパゴさまのもんだよ」とのテーモの言い草があつて、楽隊に演奏曲目を変更させて踊りだし、「わざとみんなの邪魔をするやうにうごきまはる」というデステッパゴの我が物顔の振る舞いの目立つこの〈広場〉の正体は、いったい何なのだろう？ それは、歌合戦がもととなつてファゼーロと山猫博士のあいだに生じた決闘さわざに結着のついたところで、明らかとなる。ファゼーロの決然たる動きにたちまち怖じ気づいたデステッパゴが虚勢を張りつつ退場し、テーモほかの取り巻き連中も姿を消したあとの状況を、みればよい——「にはかにみんなが元氣よくなりました」とあつて、キューストの問い、「いったい今夜はどういふんですか」に、「みんな」は口々に「いゝや、山猫の野郎来年の選挙の仕度なんですよ。たゞで酒を吞ませるポラーノの広場とはうまく考へたなあ。」「この春からかはるがはるかや

ってみんなを集めて吞ませたんです」と答えている。

祭の正体は、デステウパーゴの選挙目当ての買収運動とわかれば、「いや」になるのはひとりキューストにかぎるまい。しかも「ポラーノの広場」の名をかりたそれは、大方の眼に、伝承の理想郷を「冒瀆する」企てとうつるはずだ。話を聞けば聞くほど、キューストは「もうたまらなくいやになり」、「帰らう」とファゼーロに声をかけて、さっさとはんの木の前をあとにする。⁽²¹⁾「そのとき青く二十日の月が黒い横雲の上からしづかにのぼってきました。ふりかへってみるともうあのはんの木もあかりも小さくなって銀河はずうっと西へまはりさそり座の赤い星がすっかり南へ来てるました」と、回想は記す。時刻はもはや真夜中に近い。俗悪な人物の権勢欲の目印しといえる「はんの木」と「あかり」とはすでに「小さくなって」、月と銀河とさそり星の澄んだ光が広大な天に輝く帰り道の夜景に、キューストは自身の不快を洗われる思いがしたのではなからうか。だがこの夜の彼は、〈千慮の一失〉の愚をおかす。ファゼーロをひとりで雇い主のもとにかえすべきではないと思い、現に「わたしもいっしょに行かうか」とも「わたしのうちへ来るかい」とも言いだしているのに、相手が「いよ。大丈夫だよ。……」と答えるのを聞くと、つい役人の易きにつく自己保身の「癖」がでて、「ファゼーロがさう云ふならよからう」という気になって、別れてしまうのである。もしもこのとき、キューストがどこまでも友の身を気遣う思いを優先していたら、以降のなりゆきは、現行とかなり違ったものとなっていたに相違ない。それにしても「南の方へ行く」ファゼーロの影の方をふり返りながら、帰宅したのは「二時」というから、日付けは変わっていたわけだ。

四の「その次の次の日」のでき事、警察署への出頭と事情聴取とは、す

でに触れたので、いちいちくり返さない。ここでは、読み直して気づいた二、三の事から取り上げておく。まず警察署はキューストの勤める役所の近くに在るらしいこと。所長から召喚状を渡されたキューストは、役所を出てから「巨きな桜の街路樹の下をあるいて行って警察の赤い煉瓦造りの前に立」つと、四のはじめにあるので見当がつくのだが、するとその辺りはモリーオ市の中枢部に当たる官公庁街なのだろう。その「赤い煉瓦造り」のいかめしい建物に入った彼の、ファゼーロの失踪を知ったときの驚きと心配と後悔とが、次に眼につく。「あゝあの晩ファゼーロが帰る途中で何かあったのだな、……」と考え、たちまち最悪のなりゆき、待ち伏せしたデステウパーゴと手下たちが若者をさんさん痛めつけたあげく、その身体を「乾溜工場のかまの中に入れる」という恐ろしい場面を想像して身ぶるいするとともに、「あゝあのときなせわたくしはそのままうちへ帰ってねむったらう……」と、激しい後悔にさいなまれなければならない。そこには「窓の外」を通る人びとのなかにファゼーロの、デステウパーゴの姿をみたように思われる——ともあって、何らかの衝撃で心が締めつけられると、想像力が活発に働く事例を、キューストについて認めることができる。

いまひとつは、ロザーロとの再会、あの美しい夢の女性と冷酷な現実の場でふたたび顔を合わせたこと。控室で待機するキューストは、先に事情聴取を終えて取り調べ室から出てきたロザーロと出会う。そのときロザーロは、「召喚人はお互話することはならん」という警察側の警告を意識して「どきまぎ」する彼に、「だまってしづかにおじぎをして」表へ出ていく。ところが、ようやく取り調べから解放され、「夢中で」警察署をとびだしたキューストの眼は、思いがけない光景をとらえる——「出口の桜

の幹に、その青い夕方もやのなかに、ロザークがしょんぼりよりかかってかなしさうに遠いそらを見てみました」と告げられるそれを。「遠いそら」に眼を遣るのは、どこにどうしているかわからない弟のうえに、想いを馳せているからに違いない。しかし、夕靄の漂う時刻まで、かなり長いあいだを、そこに佇んで過たずごしたのは、なぜだろう？　ひとりものを想うのにふさわしい場所は、ほかにいくらでもあるだろうに。そうみると、やはり、ロザークはキューストの出でくるのを、心待ちにしていたとしか、考えようがない。彼女はこれまで弟から話を聞いて、キューストが信頼するに足りる人物であると、わかっていたはずだ。自分とひとしく弟を愛してくれるひとを、感じとつてもいたはずだ。だからファゼーロの行方不明を機に、キューストがおのずから身近かな存在と思われたのではなからうか。

それにしても、同情のあまり「思はず」近寄って、なにかと言葉を掛けたキューストに対して、ロザークははかばかしい受け答えをしていないところが、どうも気になる。テームの所へ戻るのに、途中まで見送ろうとの申し出をためらわずに受け容れているゆえ、警戒心を抱くわけでないのは確かだろう。しかしその〈道行き〉は、「わたくしはいろいろ話しかけて見ましたが、ロザークはどうしてもかなしさうで一言か二言しか返事しませんのでわたくしはどうしてももつと立ち入ってファゼーロと二人のことに立ち入ることができませんでした。そしてこの前山羊をつかまへた所まで来ますとロザークは「もうぢきですから」と云ってじぶんからおじぎをして行ってしまひました」という〈道筋〉をたどり、「わたくしはさびしさや心配で胸がいっぱいでした」という〈結果〉をのこす。どうしてそうなるのか。そこにはあまりにも慎しみ深いロザークがいる。いやすべてに

遠慮勝ちな優しいけれど気の弱いロザークと言うべきかも知れない。それゆえ彼女の身の上に悲劇が予想されてならないのだが、以後の回想の風景のなかに、ロザークは二度とふたたび登場しないし、その噂もまったく聞かれない。「ポラーノの広場」のはこびは、大人しすぎるこの女性のなりゆきに、いち早く見切りをつけたようである。

7 ひと月あまりたつてから……〈結末〉

〈結末〉の二章も、「そしてだんだん暑くなってきました」(五)・「九月一日の朝わたくしは旅程表やいろいろな報告を持ってきまつた時間に役所に出ました」(六)と、〈トキ〉にかかわる一行から書きだされている。前者は、「その晩から毎晩毎晩野原にファゼーロをさがしに出ました」とあり、役所に「大きな扇風機も据ゑつけられました」とある前後の文脈からみて、七月なかば近くを示すと解されよう。後者は、回想冒頭の一行「五月のしまひの日曜でした」との対応の意識された書きだし、と思われる。すでに触れたとおり、〈結末〉には、キューストがロザークと別れた六月二十九日の夕方から、精確には三十三日たった八月二日と三十日、そして九月一日のでき事が細かく伝えられている。ふたつの章の小見出し、「セングード市の毒蛾」が夏を、「風と草穂」が秋を印象づけることも、すでに注意したところだが、あらためて、五と六とのあいだに「誌」されざる一日の在ることを、確認しておきたい。わずかな空白、けれども〈トキ〉の流れは五の終わりでいったん停止して、六でふたたび流れたのである。それは、夏と秋と季節を分ける〈語り〉の標識なのだ、と思う。

「海産鳥類の卵採集の為に八月三日より二十八日間イーハトーヴォ海岸

地方に出張を命ず」と記された命令書と、旅費として「大きな紙幣を八枚も」受け取り、役所の「大きな」カメラと双眼鏡を借りて帰宅したキューストは、街に出て「持っていたレコードをみんな町の古時計屋へ売ってしまひ」、その金で「大きなへりのついたパナマの帽子と卵いろのリンネルの服を」買った、という。「古時計屋」とはわたしの記憶にはない珍しい店だが、旅装を調えるために、大事にしていたレコードを「みんな」その店に売ったというところに、キューストの張り切りようが、のぞく。同時に、デステッパゴやテーモ、またいまもおあとを絶たない公私混同の連中と違って、公費と私費の区別をしっかりとわきまえている〈役人〉の姿勢のうかがえるのが興味深い。北の「サーモの町」から南下して「となりの県のシオーモ」にいたる海岸伝いの旅は、ときおりロザロ姉弟のことを憶いだして心の痛むわが身に、「われわれはやらなければならぬぞ」という勇気を与えてくれるほど、充実したものであったようだ。にもかかわらず、そのためにファゼーロとの〈行き違い〉が生じたことも、いらない。次の章で明らかとなるように、キューストが発した八月三日の朝からちやうど一週間して、ファゼーロはモリーオ市に帰ってきたのである。「いすかの嘴の喰い違い」で、物事はどうしても思うままにはならぬものらしい。

としても、旅の終わりにセンターダード市に着いた八月三十日の、その夜に、街の床屋で偶然あの山猫博士、警察署でいなくなったと聞かされて以来ひそかに気になっていたデステッパゴと隣り合わせて、事情を確かめる機会をつかんだのだから、キューストはそれでよしとするべきなのだろう。毒蛾にやられて騒ぎだす隣の椅子の客をみると、「それこそ」ひどく「瘡せては」いたが、紛れもないデステッパゴで、しかも向こうは此方に気

づかない。そこで整髪が先に済んだのを幸い、表で待ち受けることにしたという。店の大きなガラス戸のわきに立つキューストの目に映る、毒蛾の発生した街の夜景——「あのセンターダードの市の大きな西洋造りの並んだ通りに、電気が一つもなくて、並木のやなぎには、黄いろの大きなラムブがつるされ、みちにはまっ赤な火がならび、そのけむりはやさしい深い夜の空にのぼって、カシオピアもぐらぐらゆすれ、琴座も臙にまたゝいたのです。どうしてもこれは遙かの南国の夏の夜の景色のやうに思はれたのです」、「いろいろな羽虫が本当にその火の中に飛んで行くのも私は見ました。向ふでもこっちでも、繻帯をしたり、きれを顔にあてたりしながら、またちの人たちが火をたいてゐました」と「誌」される在り様は、怪しく不思議な夢に似て、「わたくし」と同様、読者も「胸の躍るのをやめることができ」ない。

夜の情景に魅せられながら、しかしキューストはいま自身がなにをなすべきかを、忘れはしない。アセチレン燈の光で「青い海の中のやうな床屋」からデステッパゴが出てくるのを見届けると、「すっかり事情を調べてから」会うか、警察に知らせて「押へてしまつてもらほうか」と考えながら、あとを随いてその家までゆく。そして玄関先で、直接自分の手で確かめようと意を決して、「デステッパゴさん。しばらくでしたな」と声を掛け、事情を糾たしかかるのである。「ぎくつとして」足を止めた相手に向かつて、意図的ではないにしても、イーハトーヴォの警察が捜索中で「すっかり手配がついてゐます」との「うそ」の情報を交えながら、ファゼーロはどこか、なぜこんな所へ隠れたのか、なぜ警察に旅行届を出して逃げたのか——と、次々に相手を問いつめていく様は、キューストが被疑者から取調べ官へと立場を変えたカタチで、前章の事情聴取の場面と逆対

応をなす、とみられておもしろい。

追求の焦点がモリーオを離れた事情に移ったところで、「やっと落ち着いたデステッパゴはキューストを家にあげ、応接室に招き入れて、「わたくしがこゝへ人を避けて来てゐるのは全くちがった事情です」と、自分の行動がファゼーロの失踪とは関係のないことを、まず釈明したのち、その「事情」を詳しく告げている。「全財産も賭して」、ムラードの「林」に「木材乾溜かんりゅうの会社」をたてたところ、事業がうまくいかず、損失を来したために、重役会の発議にしたがって工場の施設を「醸造所」に転用し、「ごくわづか造って見た」試作品を、税務署へ届け出なかったことが、「ある部下のもの」に脅迫の「たね」にされて、ひどい目に会ったことを語り、六月二十七日の情況に触れて「あの晩はじつに六ヶしい場合でした。あすこに来てゐたのはみんな株主でした。わざとあすこをえらんだのです。ところが株主の反感は非常だったのです。わたくしももうやけくそになつてあゝいう風に酔つてゐたのです。そこへあなたが出て来たのですからなあ」と話すデステッパゴの説明を、ああそうであつたかと認めてしまつたキューストは、さらに「しょんぼりと」した様子で、「いまわたくしは全く収入のみちもないので。どうか諒解りやうかいしてください」と附け加える相手に、隣れみさえ覚えながら、別れを告げた——というカタチで、この場のなりゆきにひとまず結着がつく。だが、それで事態が片附いたわけではない。

八月三十日夜のセンター市での会見の場面で、デステッパゴはキューストを相手に、巧みな〈演技〉を披露したことが、したがってそのなりゆきは実はキューストの人の好き、認識の甘さを証明するものだったことが、二日後に明らかとなつて、読者に苦い後味をのこす。尤もらしい説

明を聞きながら、キューストは、二の地図を前にしたミローのセリフ、「乾溜工場はどれたらう」、在るのは「去年からだよ」、場所は「ムラードの森のはづれたよ」を、思いだしたに違いない。けれども、「あの頃」すなわちふた月前の「こと」を思い浮かべたときに、どうして、デステッパゴが退散したあとの人びとのセリフに、いま一度気づかなかつたのだろう。「たゞで酒を呑ませるポラーノの広場とはうまく考へたなあ」、「その酒もなあ」、「そいつは云ふな。さあ一杯やりませんか」という言葉、そして〈広場〉に豊富に用意されていた酒——それらの記憶がひきだされていたら、工場の「醸造所」への転用の話と盛んな密造のイメージが結びついて、「試験的にごくわづか造って見た」としかいわないデステッパゴの態度に、不審を抱くことになつたらうに……。やはり博物局勤務の十八等官は、認識の甘さを指摘されても、止むを得まい。それにしても、虚実を取り繕つてしおらしい姿勢を示してみせる、山猫博士の〈猫被り〉振りはどうだろう。そうして他者を欺き、法網をくぐり抜けて〈悪〉をなすに違いない彼を想うと、床屋で毒蛾に触られて頬を腫らしたこのデステッパゴこそ、毒蛾に同類と認められた「センター市の毒蛾」にはかならなかつたと考えずにはいられない。

順が先後するけれども、六の、すでにつめくさの花が「驚いろに枯れた野原で、キューストがデステッパゴの動静に通じた「百姓」から、その実情を聞かされる場面をここにみておこう。キューストの告げる、センターで見聞きした山猫博士の在り様は、どれもこれもその男によつて否定されてしまふ、——「いゝえ、デステッパゴは落ちぶれるもんですか。大将センターのまちにたくさん土地を持ってるますよ」、「どうして、どうして、あの山猫がそんなこと（*乾溜会社に全財産を投入したことをさす）

をするもんですか。会社の株がたどみたいになったから大将遁げてしまっ
たんです」「どうしてどうして。酒をつくることなんかみんな大将の考
んですよ」「あなたよっぽどうまくだまされておいでですよ。(＊中略)そ
の密造なら二年もやってるたんです」という具合に。四番目の話でキュ
ーストはやっと「じゃポラーノの広場で使ったのもそれか」と気づくのだが、
もう遅い。自分の「理解解」をすべて裏返されてしまつては、何が「本当か」
はわからない、ということになって、問題はなお尾を引くわけだが、デス
テッパゴがモリーオ市から、イーハトーヴォの野原や林から姿を消した
点に、その結着が求められていいのだろう。回想のたどるなりゆきは、そ
こで山猫博士のうえを離れて、もっぱら新たな事態のあとを追うことにな
るのだから。

「風と草穂」の〈秋〉のその事態を伝える六は、最初に、キューストが
何よりも心に掛けていたファゼーロとの再会を果たしたことに触れている。
例のごとく役所に出て必要な仕事をして、「夕方」帰宅したキューストは、
椅子に腰を下ろしたまま眠りこんでしまい、岩礁のあいだを小舟で漕ぎ廻
っているうちに、「むかし風の竜が出てきて」はねとばされた夢をみて、
眼を覚ます。「誰かわたくしをゆすぶつてゐたのです。／わたくしは何べ
んも瞳を定めてその顔を見ました。それはファゼーロでした」と記される
一節に接して、多くの読者はほっとするに違いない。「八月の十日に帰っ
てきた」、それまでは「センダードのまちの革を染める工場へはひつてゐ
た」と告げるファゼーロは、六月二十七日にキューストと別れてからのな
りゆきを語って、あの晩どうしても主人の許へ戻れず困っていたところを、
車で通った「革を買ふ人」に拾われ、その人の工場で働きながら製革と染
色の技術を習得したのだ、という。デステッパゴの〈消滅〉によって気

弱になったのか、主人のテーパーも、確かな技術を身につけた一人前の職人、
短いあいだに精神的にもたくましさを増したファゼーロに、自立と自由を
認めたという。そのときから、〈ポラーノの広場〉をめぐる事態は、新た
な一歩を踏みだしたのである。

「ムラードの森の工場」を使って「革の仕事をしろ」という、「年より」
すなわち村の長老たちの提案を受けとめたファゼーロは、ミークたち数人
の仲間に諮って、堅実な「産業組合」の設立を目指す。具体的には皮革の
ほかにハムの製造、醋酸の醸成などを予定するそれは、地域の人びとにゆ
とりと平和と幸福をもたらすための〈生産共同体〉と目されている。工場
のあるムラードの森は、すべてが虚しくなつて「たゞ一つのから箱」がの
こるだけの、例の広場から「三十分」ほど歩いたところに在つて、キュ
ーストが近づくと、「木屑のやうなもの匂」が鼻をつき、「大きな黒い建物」
が見えてくる。たち込めた夕闇のなかに、窓から灯火が洩れて、なかでは
まだ誰かが働いているらしい。ファゼーロや、途中まで出迎えたミークた
ちとともに「建物の中へ入つ」たキューストに挨拶した老人は、以前から
ここにつとめていた人物にほかならない。

〈共同体〉のメンバー一同の顔が揃つた室内ではさっそく、今後の仕事
の手順をめぐる論議が熱心に交わされるのだが、〈共同体〉に托する決意
の語られる後半こそ、標題「ポラーノの広場」に即して注目されなければ
ならない。いくつかのセリフに直接耳を傾けよう、()のなかに、それ
ぞれの発話者のイニシアルを掲げておく、——「さあよしやらう。キュ
ーストはたびたび来て見てくれるだらう」(ミ)、
「あゝぼくは畜産の方にも
林産醸造の方にも友だちがあるからみんなさそつて来てやるよ。ポラーノ
の広場のはなしをしてね」(キュ)、
「さうだ、ぼくらみんなで一生けん命

ポラーノの広場をさがしたんだ。けれどもやつのことでそれをさがすとそれは選挙につかふ酒盛りだった。けれどもむかしのほんたうのポラーノの広場はまだどこかにあるやうな気がしてぼくは仕方ない」(ファ)、「だからぼくらはぼくらの手でこれからそれを拵へようでないか」(ミ)、「さうだ、あんな卑怯な、みつともないわざとじぶんをごまかすやうなそんなポラーノの広場でなく、そこへ夜行つて歌へば、またそこで風を吸へばもう元気がついてあしたの仕事からだいいばい勢がよくて面白いやうなさういふポラーノの広場をぼくらはみんなでこさへよう」(ファ)、「ぼくはきつとできるとおもふ。なぜならぼくらがそれをいまかんがへてゐるのだから」(ミ)、「さあよしやるぞ。ぼくはもう皮を十一枚あすこへ漬けて置いたし、一かま分の木はもうそこにできてゐる。こんやは新しいポラーノの広場の開場式だ」(ファ)。

ごたごたと解説を加える必要はあるまい。ひとたび聴けば、ファゼーロたちがムラードの森に活かそうとするものが何かは、瞭然だろう。ミーロの、そしてファゼーロの決意は、〈共同体〉に参画したもののすべての思ひであるに違いない。しかしひとつ気になるのは、キューストの立場だ。ふたりの口にする「ぼくら」のなかに彼ははいるのか、はいらないのか。ミーロとのやりとりが示すように、側面からの援助は約束するが、現職をなげうって、〈役人〉の身分を捨てて、「ほんたうのポラーノの広場」を創造する営みにしたがることは、ない。ファゼーロたちに限りなく近づきながら、ついにともに生きようとは、していない。そこに、「水」の祝盃と「広場のうた」の詠唱と万歳三唱で「開場式」を終え、帰路についた「私たち」が「いつものところ」で別れたあと、ひとり、野原にまだともっていた「小さなつめくさのあかり」を摘んで襟にはさんだキューストの眼に、去って

行く「みんな」の姿が、回想するいまと同様「青いむかし風の幻燈のやうに」映った所以を、みいだすことができよう。その意味で六の最後の一行「そしてわたくしもあるきみんなも向ふへ行つてその青い風のなかのアセチレンの火と黒い影がだんだん小さくなったのです」も、注目されている。回想の六章のはこびはさまざまな紆余曲折を経て、この情景に行きつき、そして終わるのである。

おわりに

「イーハトーヴォ暦」一九二七年九月一日の宵、〈秋〉を迎えたムラードの森で、キューストは、必要になればいつでも役所の知人を連れてくると約束したわけだが、しかしこのとき、大いなる理想を語る若者たちの言葉を全身でしっかりと受けとめ、みずからもその実現のためにも働く決意を、なぜもたなかったか、とあらためて思う。もしもこのとき、雷雨の夜のガドルフが百合たちに認めたのとおなじ強固な連帯感を、ファゼーロやミーロとのあいだに培っていたら、彼もまたイーハトーヴォの大地に根をおろすひとりとなって、〈故郷喪失〉の憂き目をみる身とはならなかったはずだ。けれどもモリーオを離れるその日が来るまでの三年間、キューストは依然として、「何べんも遊びに行つたり相談のあるたびに友だちにきいたり」するという立場に在り続けた、と〈あとがき〉は「誌す」。レオーノ・キューストとは、もともと〈行動するもの〉ではなく〈視るもの〉なのではなかったか——との思いを、わたしはそこに抱くのだが、どうか。視たところを、分類整理して記述することが得手であったことを付け加えてもいい。だから博物局の標本係は、性分に適つたつとめにほかならな

ったのである。そのキューストが、「それからちやうど七年たった」いま、「ひとり孤独な《もの書き》の仕事をやっている」のも、偶然ではあるまい。

「昨日」手にした思いがけない故郷の便り、厚紙に印刷された楽譜と歌詞とは、キューストの裡に強い思郷の念を呼びさましたことだろう。「ポラーノの広場」と題された歌を、《つめくさ灯ともしす 夜のひろば／むかしのラルゴを うたひかはし／雲をもどよもし 夜風にわすれて／とりいれまぢかに 年ようれぬ／まさしきねがひに いさかふとも／銀河のかなたに とみにわらひ／なべてのなやみを たきどもしつゝ、／はえある世界を ともにつくらん》と口ずさみながら、伸びやかで満ち足りたその調べに合わせて、古歌にある「昔をいまになすよしもがな」の思いをかき立てられたに違いない。けれども、それは叶わぬ希いであることを、この《故郷喪失者》は識っている。ゆえにキューストの「誌」した最終の1節、「わたくしはその譜はたしかにファゼーロがつくったのだとおもひました。／なぜならそこにはいつもファゼーロが野原で口笛を吹いてゐたその調子がいっばいにはひつてゐたからです。けれどもその歌をつくったのはミールカロザーロかそれとも誰か^たわたくしには見わけがつきませんでした」は、いかにも切ない。まだ聴き分けのつくファゼーロの「調子」も、昔はいまにならない以上、確実に記憶にとどまる保障はないのだから。レオーノ・キューストの人生において、《故郷》とは、また《ポラーノの広場》とは、室生犀星の詩「小景異情」の一行のごとく、ついに《遠きに在りて想ふもの》なのであった。

〔注〕

- (1) 本論における作品のテキストは、ちくま文庫版『宮沢賢治全集 7』（一九八五・一二 第一刷）所収の「ポラーノの広場」を使用した。それは同書の一五四ページから二三三ページまで、八〇ページにわたっている。なお引用文中の傍点はすべて筆者の附したものである。
- (2) あるいは何らかの雑誌に発表されたものであったかもしれない。
- (3) 正確には「九月一日」までだが、「風」が「草穂」をゆする《野分》の印象が強かったために、「十月」と「誌」したものか。
- (4) 注(1)の全集本の「本文について」(天沢退二郎)を参照した。
- (5) 『新潮 現代国語辞典』の《ハクフツ》・《ハクフツガク》の項。
- (6) ガドルフについては、「旅するものの物語——「ガドルフの百合」の教刻——」(『学苑』七六九号、二〇〇四・一一)でその在り様をたずねた。
- (7) 前注の論考の一節。
- (8) 上田敏訳「あはれ今」(『家庭文藝』創刊号所掲、一九〇七・一)。この詩境はむしろ回想するいまのキューストの在り様に近い。引用は『上田敏集 明治文學全集 31』(筑摩書房 一九六六・四)所収に據った。
- (9) もし帰郷していたら、回想はかならずそれに触れたはずである。
- (10) 注(1)の全集本所収。
- (11) 東雲堂、一九一〇(明治43)年二月刊。引用は『啄木全集 第一巻』(岩波書店、一九五三・九 第二刷)所収に據った。
- (12) テキストにはもう一個所、警察署の受付で「レネーオ・キューストでございます」(傍点引用者)と、本人の名乗るところがある。注(1)の全集本の「本文について」に、「レオーノ・キュースト」の名が警察の召喚状等で「レネーオ・キュースト」になっているのは作者の故意による可能性もあり、そのままにした」との注記があることを、付け加えておく。
- (13) 「鳥の北斗七星」については、『宮澤賢治の《ファンタジー空間》を歩く』

(双文社出版、二〇〇五・七) 所収の「^{カラス}鳥の北斗七星」―地上の〈祈り〉と天空の〈ひかり〉と」で、検討した。

- (14) 注(10)の「解説」に、「青表紙ノート(一九三二―昭和六)年四月頃から使用と推定)にメモ風^{メモ}に走り書きされた詩の中に次のような箇所がある―」として、ちくま文庫版『宮沢賢治全集 10』(一九九五・五 第一刷)に収録されたその「箇所」(三八二ページ)が、「補遺詩篇1」(同全集3 一九八六・六 第一刷)に「穂を出しはじめた青い稲田が」の題下に収められた形で、紹介されている―「まっしろなそらと／いま穂を出したすゝきの波と／B. Gant Destupago は大きな黒の帽子をかぶり／Faselo はえりをりの白いしゃつを着て／fateをかついであとから行く」。これを参照すると、作者にもデステッパゴとファゼーロは印象にのこる人物であったことがわかる。

(15) ただしセンターダウド市は推定。

(16) 原文のまま。「^{コト}コト」もしくは「^{コト}コト」の誤記かと思われる。

(17) F・シュタンツェル／前田彰一訳『物語の構造』(岩波書店、一九八九・四 第二刷)の用語を借りた。

(18) (19) 前注書の〈第二章 典型的な物語り状況―新たな定義の試み〉の〈2 物語り状況の動態化〉の節。五〇ページ。

(20) 平凡社『大百科事典3』(一九八四・一一)の〈ぎぎよく 戯曲〉の項(山崎正和執筆)、同『14』(一九八五・六)の〈ミメーシス mimesis〉の項(山田登執筆)を参照した。

(21) このときミローがどうしたかは、テキストが「二行分空白」となっているので、不明。

(22) 別稿「^{どくが}毒蛾」の「イーハトブの首都のマリオ」の情景を伝える一節が、ほとんどそのまま採り入れられている。ちくま文庫版『宮沢賢治全集5』(一九八六・三 第一刷)に収録された「^{どくが}毒蛾」のその一節を、掲げておく―

「マリオの市のやうな大きな西洋造りの並んだ通りに、電気が一つもなく、並木のやなぎには、黄いろの大きなラムプがつるされ、みちにはまっ赤な火がならび、そのけむりはやさしい深い夜の空にのぼって、カシオビイアもぐらぐらゆすれ、琴座も臍^{おぼろ}にまたゝいたのです。どうしてもこれは遙^{はる}かの南国の夏の夜の景色のやうに思はれたのです。」「いろいろな羽虫が本当にその火の中に飛んで行くのも私は見ました。また、繻^{はちま}帯をしたり、きれを顔にあてたりしながら、まちの人たちが火をたいてゐるのを見ました。」(三八〇―三八一ページ、傍点引用者)。

(えんどう たすく 本学元教授)